

2018年度プロジェクトコーディネーター中間研修 報告

日 時：2018年10月26日（金）15:00-16:30

会 場：湘南キャンパス 15号館 4階 第一会議室

テーマ：「指導」と「支援」を考える-学生の主体性を引き出すには-

講 師：現代教養センター 講師 池谷美衣子

参加者：計21名（湘南11名、札幌2名、代々木1名、伊勢原1名、清水2名、熊本4名）

1. コーディネーターの半年をふり返る

まず、5月に実施された能力研修の内容を簡単にふり返り、能力研修参加者には研修2日目に作成した「私のコーディネーター宣言」を思い出す作業を行なってもらった。その後、ワークシートを用いて、4月からの半期でプロジェクトに関わった時間の算出、「コーディネーター湘南宣言2017」の「行動」項目と「役割」項目の自己採点・評価を行なった。

「コーディネーター宣言」を評価指標として用いることは、自身の関わりを省察する手がかりとして有効である。同時に、現行の「コーディネーター宣言」は理想・理念が先行しがちであるため、評価指標・規範として無理のない、より実態に即した内容・表現へのバージョンアップも検討する必要が感じられた。

2. 「指導」と「支援」を考える（話題提供・グループでの意見交換）

続いて、講師より上記テーマについて20分程度の話提供を行なった。「指導」と「支援」に関しては、必ずしも明確な使い分けがなされているわけではない。東海大学の公式サイトで、「指導」「支援」（「勉強」「学習」）がどのくらい使われているかを概観し、その具体的な用法をいくつか例示した。教育分野においては、一般に、外から働きかけて、一定の水準以上に引き上げる営みには「指導」が、主体性をもつ対象に対する直接的・間接的な働きかけには「支援」が用いられる傾向がある。したがって、まったくやる気がない対象（主体性0）への「支援」は難しく、主体性を引き出すためには、まず「指導」が必要となる。一方で、主体性がある対象には、それを実現するための「支援」が求められる。

この視点から「コーディネーター宣言2017」を再読すると、プロジェクト学生はやる気（主体性）があることが前提となっていること、「宣言」には指導的な表現はほとんどなく、支援が念頭に置かれていることが確認できる。そのこと自体の是非についても、意見交換の対象とした。さらに、「支援」支援的な関わりの例として、教えない・押し付けない・質問する・相手の関心を引き出すなどを基本とするコーチングを紹介した。

以上を踏まえて、計5グループに分かれて普段のプロジェクト学生との関わりをふり返りながら、30分程度の意見交換を行なった（湘南3班、九州1班、伊勢原・代々木・清水・札幌1班はテレビ会議システムを利用）。

3. まとめ

最後に、各グループが発言し全体共有を行なった。コーディネーターが意識的に行なっている「指導」としては、安全面・提出期限などのルール・学外者等へのマナー・書類作成などが共通してあげられた。それ以外の場面では「支援」が意識されており、提案する姿勢が重視されていた。一方で、「指導」も「支援」も必要なく、コーディネーターの必要性があまり実感できない場合や、「限りなく指導に近い支援」によってプロジェクトの方向性に関わる必要に迫られている場合など、プロジェクトによる状況の違いが浮き彫りになった。

講師からは、学生と職員の間には力関係があることを自覚すること、やってみたい気持ち（主体性）は不安や自信のなさで混在して表明されることが多く、学生を信じて失敗してもいいという姿勢で伴走的に支援してほしいという総括をした。活動の成功だけでなく、それ以上に「教育プログラムとしてのプロジェクト」の意義を考えること、コーディネーターと話した学生が元気になって帰っていくような支援をお願いして、閉会とした。

（文責：池谷）